

祈りの輪で地球を囲む

12月8日は「祈りの輪」の日」

創始者・ポール・W・アレキサンダー

良質の職業人

2010年12月08日 東日本区1998～2011 ヒストリアン 吉田 明弘

12月8日は、ワイズの『祈りの輪』

12月8日は、ワイズの『祈りの輪』として、世界中のワイズメンが、同じ時間に祈り、その輪で、地球を囲み込もうという日です。

これは、1998年のヘルシンキ・タリンの国際大会の前に行われた国際議会で決まりました。

ロシアのあるクラブから、世界中のワイズメンが、「世界平和」と「地球環境保全」のための祈りを、定められた日の同じ時刻に一齐に捧げようという提案がファクシミリで寄せられました。

国際議会は、これを受けて、キリスト教強調 (Christian Emphasis) 国際事業主任がこの運動をプロモートして、ワイズメンズクラブの創始者である、ポール・W・アレキサンダー (Paul・W・Alexander) の誕生日である12月8日に、それぞれのローカルタイムでの同時刻に、各自が祈りを捧げることに合意しました。これは、この祈りの連鎖が24時間にわたって継続することを意味しています。

この年、1998年の12月8日から始まりました。祈りは特に宗教を問わず、午後7時から8時の間に、日付変更線のすぐ西のフィジーから始まり、ニュージーランドから、オーストラリア東部、日本、という順に祈りの輪が描かれました。

東日本区では、当時の鈴木健次区理事の急な呼びかけで、1998年の12月8日午後7時 - 8時、東京YMCA会館のチャペルに5人が集まり、祈りの時を持ちました。

その後は、個人による祈りとなって、メーリングリストによる『viva-ysmen』での呼びかけと交信が行われました。

青木一芳さん(千葉)によりますと、この提唱に最も忠実に呼応して毎年実践しているのはス

リランカのワイズメンだそうです。

それぞれの地域で同時刻に祈れば、24時間で地球を囲む輪ができるわけですが、その連帯が実感できないところが残念です。国際事業主任が呼びかけて、インターネットを利用して、映像も含めた報告が各地から発信され、編集する工夫が出来れば、一体感が生まれると思います。

創始者・ポール・W・アレキサンダー

ポール・ウィリアム・アレキサンダーは、ワイズメンズクラブ国際協会の初代会長でした。就任時、33歳でした。

1922年11月17日から1924年10月18日まで国際会長を務めました。

彼は、1920年に設立されたワイズメンズクラブの前身である、オハイオ州トレド市のトリムカクラブ (Tolymca Club) のチャーターメンバーでした。

やがて各地のYMCAに同様なクラブが生まれてくると名称をワイズメンズクラブと変更して、さらに1922年には、国際組織であるワイズメンズクラブ国際協会を創立するのです。この経過はここでは省略しますが、アレキサンダーは孤軍奮闘、心血を注いで、クラブづくりと国際的なクラブとしての組織づくりに邁進しました。1920年から1926年までを、「苦闘の6年」と讃えられています。

国際協会は、1926年、彼を名誉会長として、3年間の国際理事会における議決権を贈り、1929年には終身の議決権を贈っています。彼は一度もこの権利を行使しなかったとされています。

現在に残る彼の功績は、国際憲法の制定、ワイズメンズクラブの名称の制定、入会式辞の

策定、役員就任式辞の策定、国際標語の策定、
ワイズソング『Once More We Stand』の作詞
など数々あります。

彼は、1967年6月29日、78歳で逝去しました。1922年の国際協会成立前からの57年にわたるワイズメンのリーダーでした。

良質の職業人

アレキサンダーについて、日本では「ハーバード出身の新進気鋭の判事」と書かれたものが多くあります。ここでは、法律家としての彼の側面をご紹介します。

ポール・W・アレキサンダーは、1888年12月10日、米国・オハイオ州トレドで生まれました。デニソン大学とハーバード法律学校を卒業し、個人で弁護士業を行った後、Lucas郡の検事局などに勤務し、1937年にLucasの少年審判所と家庭裁判所の判事になりました。

彼は、退官するまで、ここで働きましたが、National Council of Juvenile Judgeの会長、National Conference of Juvenile Agencyの会長に選ばれています。雑誌のタイムやライフなどで紹介される、全米でも有名な裁判官でした。彼の多くの原稿が法律専門誌や一般誌に掲載されました。ボウリング・グリーン州立大学、デニソン大学、ジョージ・ウィリアムズ・カレッジの学位も得ています。

広島裁判所の図書館で浅野純子さん(博多オーシャン)が見つけてくれた『家庭裁判所の史的発展』(家庭裁判所調査研究所)に、アレキサンダーについての記述があります。彼は、「離婚・婚姻および家庭裁判所に関する特別委員会」の議長、「家庭生活に関する全国会議」の委員長を務めていました。

離婚が増加している米国において、彼は、「裁判所が離婚の自働販売機と化している」「離婚裁判は、単に検死にすぎないのであって、離婚の宣言はその埋葬許可である」と批判しています。もっと婚姻関係全体から、根本的な原因を究明して、

他の科学や教育など、あらゆる有用な社会資源を活用して、その原因の除去、矯正を図るべきだと提案しています。

実際に、彼の勤務する裁判所では、この方式を採用した、とあります。

日本の家庭裁判所も、これに刺激されて、多くの理論と技術を学び、日本の裁判官や調査官が、トレド裁判所の視察・見学を行ったそうです。

あとがき

1998年頃、元国際会長の故鈴木謙介さん(大阪センテニアル)に、「ポール・W・アレキサンダーが、戦後まもなく来日して、天皇に拝謁したことがあるという説があるけど、調べて欲しい」と言われました。

あるワイズメンが、戦後間もないころ、帝国ホテルのエントランスで、ひとりの外国人から、「皇居はどこか」と尋ねられました。多分、そのワイズメンは、アレキサンダーの顔は知らないでしょうから、後になって写真で見たアレキサンダーにそっくりだったという話が発端だったのでしょうか。

調べるといっても、当時は、国立公文書館などでの閲覧は考えませんでした。ひとつの方法として、侍従であった『入江相政日記』の頁を1頁ずつめくりました。天皇の面会者の記録があるからです。思いがけない収穫がありましたが、目的は果たせませんでした。

しばらくして鈴木さんから、「あの件は、もうなしにしてください」と言われました。アレキサンダーの娘さんと会うことがあって、来日の件を尋ねたら、「父は、日本どころか、ハワイにも行っていません」と言われたそうです

逝去が1967年。1966年の第42回ホノルル国際大会の参加は、すでに病身で、かなえられなかったのでしょうか。